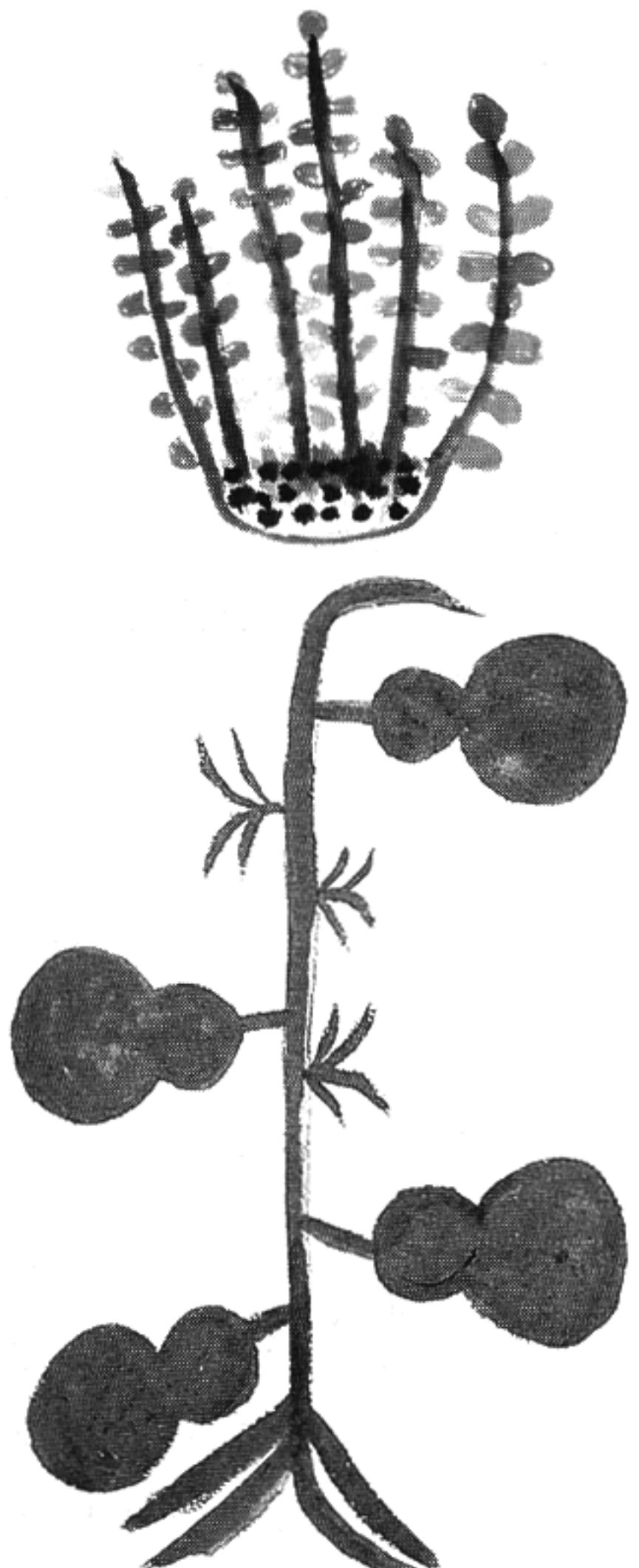


創刊号

蒲田風箋

昂
すばる

発行所
(株)鳥久
東京都大田区蒲田1-8-12
電話 03(5703)7575
发行人 小原秀之
印刷所 三盛商事(株)



「はなび」齊藤けさ江書 平成15年作

小さな村に今年九十歳を迎えた
一人のおばあちゃんがいる。
雨さえ降つていなければ、夏
の暑い陽射しの中でも午前中は
煙で野良仕事をし、お昼を食べ
た後は、ひと眠りしてから好き
な字を書いてたり絵を描いたりが
日課だ。夜寝る前の日記も欠か
したことがない。

このおばあちゃんの名前は斎
藤けさ江さん。
腰は長年の農作業で九十度近くまで曲がってしまった。腰が伸びていたとしても身長は百四十センチそこそくくらいしかないとお見受けするが、いつたん煙に入るとびっくりするほどのパワーの持ち主だ。体に似合わず太く大きな手は、しっかりと大地に根を張った豆の根っこをグイグイ引き抜き、水まき用の長いホースもグイグイ手繰り寄せられる。

すぐにへばってしまう今時の若い者と比べると、やつぱり昔の人は基礎体力が違うと思ってしまう。

自宅から自分の畠まで三十分メートルほどの距離の途中の藪の奥に斎藤家の屋敷神が祀られているが、けさ江おばあちゃんは、畠の行き帰りに挨拶を欠かしたことがない。何やら口の中でブツブツ呪文めいた言葉を唱えて深々と頭を下げる。

房総半島の奥まった、とある小さな村に今年九十歳を迎えた一人のおばあちゃんがいる。雨さえ降つていなければ、夏の暑い陽射しの中でも午前中は煙で野良仕事をし、お昼を食べた後は、ひと眠りしてから好きな字を書いてたり絵を描いたりが日課だ。夜寝る前の日記も欠かしたことがない。

筆先から溢れ出た書と絵

九十歳を迎えた斎藤けさ江さんの書と絵の個展が、今春に表参道のギャラリーで開かれた。書家でもなければ、画家でもない、一人の農婦の個展である。会場には、けさ江さんの人生が投影された書や絵、そして家族に宛てた心温まるメモなどが展示され、大勢の来場者の感動を呼んだ。創刊号では、このけさ江さんの作品の原点となる、日常生活や生い立ちを紹介したい。

煙に入る時もそうだ。帰りも感謝の言葉を述べておじぎをする。

自分が育てている野菜たちとの会話もごく当たり前だ。

——いい子に育ちなさいよ。

蛇が出てきたら出てきたで、何やら蛇に言い聞かせている。

隠れた日本の人間遺産

人間は皆平等に老いる。髪も抜け、歯も抜け、目は見えなくなり、耳も遠くなり老醜は避け通れない。そしてその先に死への恐れが待っている。美しく老いるとはどういうことか。

その答えは、このけさ江おばあちゃんの生みだす書や画の中に潜んでいるよう思われる。

長生きはしたたくない——といふ言葉をどこかで聞いたかと思うと、

長生きはしてみるなんだ——

という言葉が一方である。

人間は死に方を、自殺以外選ぶべきがないし、また年齢も選ぶことはできない。

九十年という歳月を生き抜いてきたことだけでも人生の達人というべきだろう。明治・大正、昭和・平成と、関東大震災をはじめ大恐慌や太平洋戦争とともに激動の世紀に翻弄(ほんろう)されながら、すべてに感謝と安



今でも畠仕事をするのが日課になっている

農村の嫁、ましてや後妻は子育てと労働力だった。嫁いだ相手は、高校の書道教師というイニテリだった。

ところが皮肉にも、けさ江おばあちゃんは小学校もまともに出ておらず、読み書きのできない文盲だった。

日本に文字の読めない人がいる、とは今日の私たちの考えの及ばないところで、貧しさも含めて遠い過去のように思えるが、つい昨日まで日本はそういうあつたし、けさ江おばあちゃんのような人はたくさんいたに違いない。

けさ江おばあちゃんが六十歳になった時、家中でメモを書き残すことができた。

けさ江おばあちゃんには男の子の孫が二人いる。その孫から平仮名を教えてもらい、鉛筆をナメナメしながら、たどたどしい文字を廣告のチラシの裏などに書きはじめた。一枚のメモを

書きのに何十分もかかったそうだ。文字通りの六十の手習いである。

ある時、まだ小さい孫が粗そうをした。

「そそうをしからないでください

というメモを見た息子の五十



作物の絵には根っこを描く

おおむね十ヶ月
で、ハミングバードは飛んでいた
が、ハミングバードは飛んでいた
が、ハミングバードは飛んでいた
が、ハミングバードは飛んでいた

けさ江さんが家族に宛てたメモ

人間の営みの根源や、情念の世界を見つめ続けてもきたし、書の文化そのものにもそのような眼で捉えることのできる複眼的な力の持ち主だった。

その対象がたまたま自分の母親だつただけの話だが、そのメモに書かれた文字の美しさ——書道的な表面的な形の美しさとは違うもの——に息子であることは違うもの——に息子であることを忘れて感動したのだった。

うまいか下手かといえば、目に事に下手である。下手ではある

二（いそじ）氏は、自分の母親ながらその心根の優しさと、トツトツと懸命に書かれた拙い文字に感動したのだつた。

ちなみに五十二氏は父親同様の書家である。

書家は、こんな力ツコいい字が書けるぞ、という技術が売り物の稼業である。ところが五十二氏の世間一般の書家と違うところは、若い時から民俗学や文化人類学的な素養を身につけ、その調査のために北欧やインドを歩いてきた蓄積がある。職業は書家であつても、洋の東西を

が一字一字を一所懸命に、ひたむきに書いたその心がにじみ出でていたのだった。世の中には、絵でも字でもそうだが、うまい、下手の区別のほかに、いい字、いい絵というのがある。

人間の顔も、美形でなくとも、味のあるいい顔というのがあるが如く、そこにはひとつの大害が宿っている姿に心打たれるということがある。それは感じる世界、心で観る世界といつてもいい。やがてけさ江おばあちゃんは七十歳を迎えた時に、喜寿のお祝いにと筆を取ることになつた。

——何でも好きな言葉を、好きなように書いてごらん——

とすすめられるままに亡夫の残した大きな硯で墨を磨り、紙に向かって書きはじめた。

きたい文字や言葉を自力で見つけていることだ。自分の日常の身のまわりのありふれたものに、筆で命を吹き込んでいる。借り物が一つもなく、等身大の自分で背伸びもなく嘘もない。

もう一つは線のしぶとさ、粘り強さだ。時間がかかる。紙を前にして何度も何度も手で文字入れを測つたり、一本の線を引くにも真剣そのもののゆっくりさだ。見ているだけでも忍耐が要るが、それは決して老人の鈍さや文字をよく分からぬといふことからではない。一言にいえば、やはり半年近くも雪に閉ざされて生きざるを得ない東北人気質かと思わせる。

面世界との封じこめてしまうことも、けさ江おばからは見栄やい。字を知らぐ書の技術がだけでその純ものではないやはり心のもので、書や隠しようもなは、目に見えつ、目に見取っているけ

はあちゃんの書や絵
、我欲は感じられな
りなかつた、字を書
かなかつた、といふ
純粹さを説明できる
。の有様がでてしまふ
、絵というものは、
ないもので、私たち
るものを見鑑賞しつ
えないのである。感じ
ばずだ。

ひるがえつてそのことは、合
わせ鏡のように自分の心が映つ
ているのであって、「自己」を確認、
ないしは発見していることに他
ならない。

答えると知りました。
それは、修行中にしていた食事（じきじ）作法にあつたのです。

り、本当でした
にお参りするぐ
なくてはなりま
しかし、そん
せん。よつて、

たら、全てのお墓
、らいの気持ちで
ません。

11

会場開かれた個展のDM

「サバを読む」

日頃なにげなく使っている言葉の中には、深い意味やまったく別の意味、あるいは逆の意味をもつものがあります。その中から、仏教の言葉を取り上げて説明させていただきます。

今回は諺（ことわざ）の「サザエを読む」です。

当地的田舎では、お墓にお線香やお花のほかに、お米もお供えいたします。この習慣に対して、檀家の方から「お米をお供えするのはどうしてですか、どんな意味があるのでですか」と、聞かれたことがあります。当時は大学を卒業して、お寺の仕事を始めたばかりでしたので、答えられませんでした。

しかしその後、「サバを読む」という諺自体に、その答えがあると知りました。

これまでお供えのサバの分、多めにご飯を炊くことを「サバを読む」と言います。つまり、お墓にお米を持つて行くということは、全ての物に感謝し、全ての物を供養するという意味なのです。

ちなみに、このサバとは、サンスクリット（梵語・ぼんご）です。サンスクリットとは、インドの古語です。ヒンドゥーや仏教の聖典はサンスクリットで口伝され、書き記されてきました。現代では日常的に使われることはなく、高い教育を受けた一部の人々が、学会の発表などで使うくらいだそうです。それでもインドではサンスクリットは、十五種ある主要言語の一つとして、国によつて指定されているそうです。

現在では、「サバを読む」と言つたら、何か悪いことをしているような印象を受けてます。またこの諺を辞典で調べると「サバ」を日本語の「鯖」と解釈して書かれている為に、本来の豈高な意味が失われてきていました。

*
ところで今日は、当家の先祖のご法事で今からお墓に参りますが、墓地には沢山のお墓があり、本當でしたら、全てのお墓にお参りするぐらいの気持ちでなくてはなりません。

しかし、そんなことはできません。よつて、まず自分の所のお墓を参る前に、六地蔵や、お堂の仏さんにお米とお線香をお供えいたします。

お墓に行つたら、自分だけのお墓を参る、そんな狭義ではありません。このサバをお供えすることにより、今、我々が生かされていることを全ての物や靈に感謝するのです。





夜が更ければ更けるほどカウンター席には常連がいっぱい

JR総武線亀戸駅から徒歩5、6分のところに今回の「気になるお店」の宮古島料理ラッキーという店がある。いわゆる沖縄料理屋だが、働いている人

刺しや、ヤシガニなど珍しい料理もあって、沖縄や宮古島大好きな人間が夜な夜な集まつてくれる。

泡盛も宮古島の「菊之露」はじめ、「千代泉」など各種あり、その料理もメニューにはない、その時々のスペシャルが出てくるのも楽しみのひとつだ。

が、初めての人がフライ入つて

も取りのないアットホームな作りで四、五十人は楽々だ。

しかし、なんといつてもこの

店の最大の名物は、多良間出身

のおばあと娘の店ママだ。

おばあは長い間、宮古島で知

り、まだ元気かくしゃ



宮古島郷土料理ラッキー
TEL 03・3682・9676
JR総武線亀戸駅から
徒歩6分

旅好きの始まりは大学時代。当時の旅は、日本を自分の目で確かめてみたい衝動に駆られていました。今でも田舎の駅で野宿した朝、鼻をくすぐった朝露に濡れた濃い緑の匂いや、半島の海岸沿いを炎天下、ひたすら歩いたときの寂れた漁村の風景を覚えている。

そんな旅好きは、十数年経つても変らず、今夏には北東北巡りをした。

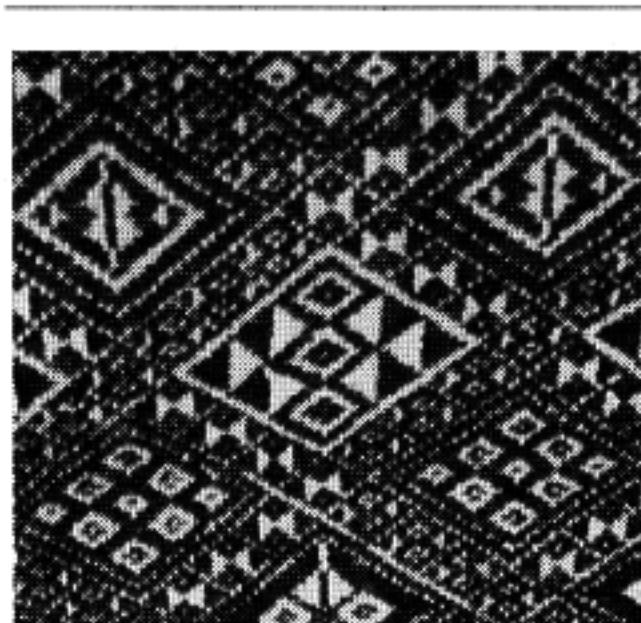
今回、出会ったのは、東京にも宮古島ラッキーの支店に昨年、身を寄せるにこなった。おばあもママも興がのると店の中で踊りだすのも客の楽しみだ。おばあの筋金入りの踊りも

おばあもママも興がのると店の中で踊りだすのも客の楽しみだ。おばあの筋金入りの踊りも

旅をするところで、山深幽谷に癒しを求めたり、都会にない不思議な文化や風土に少しでも触れてみたくはない。

久しくぶりにシュウマイ弁当を食べた。空腹のあまり、車窓の風景を見るのも忘れてガツガツ食べてしまった。しかし一気に食べたのは、空腹のせいだけではない。箸がどんどん進むくらい、旨くて正しくて偉かったのである。

それは価格が今時分、七百円と安いこと。千円札を渡して、ビル代ができるほどのお釣が返ってきた。



南部菱刺

農民に支払う米代金の変わりに、今度は古手木綿などを現物支給したそうだ。その布を前にした農婦たちは、貧しさに耐えたがらも宝づくし文や長寿文などの願いを込めて、そして着て生き抜く」という気迫がこもつているそうだ。

この旅で、その刺し子が施された小袋と、古い刺し子の野良着を購入した。

ファッショニ性の高さは、以前から認めていたものの、その歴史を知ることで、ものに対する愛着が深まつた。同時に、そのものから見える、たくさんものものを知りたいと

旅をするところで、山深幽谷に癒しを求めたり、都会にない不思議な文化や風土に少しでも触れてみたくはない。

もう一步踏み込んで、少しでも文化や風土に少しでも触れてみたくはない。

東北の女性の人生に添い合つて、その願いを込めて、そして着て生き抜く」という気迫がこもつていて、それが宝づくし文や長寿文などの願いを込めて刺していくつた。

駅弁食べ歩き



Kaiyohen's Shu-Uマイ弁当

亀戸といえば亀戸天神が有名だが、その歴史は古い。

その様子が天神近くの由緒ありそうな店が雰囲気を残しつつ、どこか下町らしい氣さくな感じが漂っている。

*

東京
亀戸

本物の「沖縄」がある 心の才アシス、ラッキー

宮古島料理 ラッキー（東京・亀戸）

ちよつと
気になるお店



東京ではなかなか手に入らない沖縄物に出会える

そんな旅好きは、十数年経つても変らず、今夏には北東北巡りをした。

旅をするところで、山深幽谷に癒しを求めたり、都会にない不思議な文化や風土に少しでも触れてみたくはない。

久しくぶりにシュウマイ弁当を食べた。空腹のあまり、車窓の風景を見るのも忘れてガツガツ食べてしまった。

しかし一気に食べたのは、空腹のせいだけではない。箸がどんどん進むくらい、旨くて正しくて偉かったのである。

それは価格が今時分、七百円と安いこと。千円札を渡して、ビル代ができるほどのお釣が返ってきた。

風来抄

シュウマイ弁当

(横浜・崎陽軒)

久しくぶりにシュウマイ弁当を食べた。空腹のあまり、車窓の風景を見るのも忘れてガツガツ食べてしまった。

しかし一気に食べたのは、空腹のせいだけではない。箸がどんどん進むくらい、旨くて正しくて偉かったのである。

それは価格が今時分、七百円と安いこと。千円札を渡して、ビル代ができるほどのお釣が返ってきた。

久しくぶりにシュウマイ弁当を食べた。空腹のあまり、車窓の風景を見るのも忘れてガツガツ食べてしまった。

久しくぶりにシュウマイ弁当を食べた。空腹のあまり、車窓の風景を見るのも忘れてガツガツ食べてしまった。

久しくぶりにシュウマイ弁当を食べた。空腹のあまり、車窓の風景を見るのも忘れてガツガツ食べてしまった。

久しくぶりにシュウマイ弁当を食べた。空腹のあまり、車窓の風景を見るのも忘れてガツガツ食べてしまった。

久しくぶりにシュウマイ弁当を食べた。空腹のあまり、車窓の風景を見るのも忘れてガツガツ食べてしまった。

久しくぶりにシュウマイ弁当を食べた。空腹のあまり、車窓の風景を見るのも忘れてガツガツ食べてしまった。

久しくぶりにシュウマイ弁当を食べた。空腹のあまり、車窓の風景を見るのも忘れてガツガツ食べてしまった。

